

魚貝類における成長に伴う形態変化と分類における意義

横川浩治 (香川県多度津町)

生物の分類は形態に基づいて判断されるが、ある種において様々な成長段階（サイズ）の標本を包括的に調べる場合、基本的に成長に伴ってプロポーションが変化しない等成長（イソメトリー）を前提に種の記載等が行なわれるのが伝統的な分類手法である。

しかしながら実際には、魚貝類の体のほとんどの部位においてプロポーションが成長に伴って増大あるいは縮小する現象（アロメトリー）が明らかとなった。特に多くの魚類においては体高や眼径のプロポーションが成長に伴って劇的に変化する。また鰭条数や鱗数等の計数形質は、成長段階の初期を経て“定数”に達した後は数に変化しないとみなされて種を分ける分類形質として用いられることがあるが、この計数形質も成長に伴って増加あるいは減少する種があることが判明した。このような成長に伴う増加や減少のパターンは明瞭な種特異性が認められ、形態的に酷似している近縁種（隠蔽種）の間でも増加や減少のパターンの差異がしばしばみられることから、新たな“分類形質”として利用できる可能性がある。

従来は、このような成長に伴う形態変化をほとんど考慮せずに分類や記載が為され、記載間の数値的な齟齬のために分類学的混乱の原因となるようなケースも散見されるが、今後の分類や記載にあたっては、このような現象を十分に考慮して研究が行なわれるべきである。